

モンゴルにおける協働学習の きっかけと活動

モンゴル国立教育大学
ナイダン バヤルマ

協働学習への関心

- モンゴルは協働学習に関心をもったきっかけはやはり日本語教育である。
- 1990年代初めの民主化により、教育方針も変わった。
- 全教育機関まで外国語教育が普及
- 英語・中国語・日本語の学習者数が多い
- 地方でも日本語教育現場が増える
- そこで、
- 1993年にモンゴル日本語教師会
- 2007年に日本語教育研究会が設立され
- 年1回の日本語教育シンポジウムが行われてきた。

協働実践研究会設立のきっかけ

- 第4回日本語教育シンポジウム(2010年)
 - 東京国際大学の岡本氏・他
 - 「日本語教育における協働学習の可能性と課題」
- 第5回の日本語教育シンポジウム(2011年)
 - 東京学芸大学の齋藤氏
 - 「自己表現を支える日本語教育
 - —学習者の多様化と日本語教育の方法—」
- ⇒協働学習に関心・注目

初体験・ワークショップ

2012年3月:日本語教育の協働
学習研修会を開催

池田氏、舘岡氏、齋藤氏による講
演とワークショップ

2013年3月:池田玲子氏、齋藤
ひろみ氏による研修会

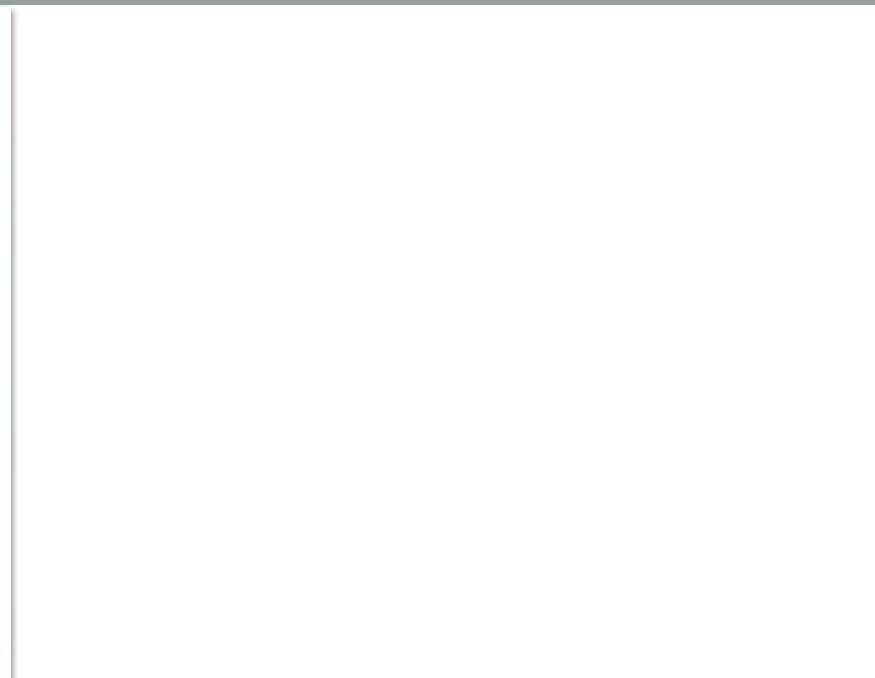
「協働学習の実践と展開」

日本語教師だけでなく、他の外国
語教師も参加し、具体的なやり方
を体験したことで、授業観が変
わったとの声があつて、実践発表
もできて有意義な場となった。

協働学習って何？ ～生き生きした授業を目指して～	
講師	池田玲子(東京海洋大学教授) 舘岡洋子(早稲田大学教授) 齋藤ひろみ(東京学芸大学教授)
内容	日本語教育の協働学習について、理論の概要と実践例をご紹介します。 また、実際に教室活動を体験していただくために、参加者全員でセン ゴルでの協働学習実践の可能性について議論します。
日程	2012年3月11日(日)10:30~17:30
場所	モンゴル国立教育大学外国語部1A館312号教室
主催	センゴル国立教育大学外国語部
後援	センゴル日本語教師会/協働実践研究会 センゴル支部

プログラム	
午前 10:30~12:00	1. 開会挨拶 講師紹介
	2. 講演1 「日本語教育の協働学習」 池田玲子氏(東京海洋大学教授)
	3. 講演2 「協働学習の経験」 舘岡洋子氏(早稲田大学教授)
	4. 実践例紹介(池田氏・舘岡氏・齋藤氏)
・・・休憩・・・	
午後(前半) 13:20~15:20	6. ワークショップ1 協働学習を体験する(学習者体験) ◎大人クラス ◎子どもクラス
・・・休憩・・・	
午後(後半) 15:30~17:30	6. ワークショップ2 授業をデザインする(教師体験)
	7. 閉会挨拶 アンケート





2012年10月：
協働学習実践研究会が設立
理論輪読・実践授業計画・実践・問題点などを
報告し合う



協働学習研修会参加者の声

- まったく違うスタイルの授業を体験したことで、有意義な学びとなり、授業観が変わった。
- 協働学習の具体的なやり方がわかった。
- 授業への新たな気づきと学びができた。
- モンゴルでは15年ほど前から「学習者中心」の教育の気運が高まってきたが、その方法は明確になっていなかった。今回「協働学習」という新たな教室活動を体験できた。
- 学習者への対応と彼らの学習意欲を向上させる方法、実際に協働学習をどのように取り入れるか体験できたことが最大の収穫であった。

•

モンゴル国立教育大学主催の研修会 教員向け

日時	テーマ	対象者(参加者数)	主催及び講演者
2012年 3月11日 第1回協働学習 研修会	「協働学習とは何？ －生き生きした授業 を目指して－」	初中等学校・大学の 日本語教師(98名)	モンゴル国立教育 大学 ・池田玲子氏 ・舘岡洋子氏 ・齋藤ひろみ氏
2013年 1月11日	「協働学習」	教育大学 外国語教員 (46名)	モンゴル国立教育 大学
2013年 1月23日	「協働学習を取り入 れた教室活動」	ウランバートル市内の 中学校の外国語教員 (130名)	教育大学 外国語 学部
2013年 3月30・31日 第2回協働学習 研修会	「協働学習の実践と 展開」	小中学校・大学の日・ 中・英・口語教員(120 名)	国際交流基金・モ ンゴル国立教育大 学 ・池田玲子氏 ・齋藤ひろみ氏

学生向け

日時	テーマ	対象者	主催者
2013年 2月	「実習生の創造的能 力向上のために」 (2頭のロバ)	教育大学3年生 (教育実習生30名)	モンゴル国立教育 大学外国語学部
2013年 3月	「蠅と蜂」	教育大学外国語学部 4年生(25名)	モンゴル国立教育 大学外国語学部

その後の活動：教師間の連携を重視

- 日本語教育研究会：
- ワーキンググループ活動を通して、他大学の日本語教員との授業実践の計画や協同研究を行っている。

- モンゴル国立教育大学：
- 外国語教員同士で授業計画など、実践相談をし合う
 - → まだ研究に至っていない！

- 問題点：
- 教員の授業時間数の多さ→授業計画・準備が難しく、実践や研究も少ない。
- 国の方針：大学は研究機関である！

まとめ・今後の展開

- 教師指導型に慣れたモンゴルの学習者は相互協力を行う協働学習を非常に肯定的に捉えている。
- 社会もチームワークができる人材を求めているため、モンゴルの教育現場には協働学習を取り入れた授業が余儀なくされている。
- 協働学習実践研究会の活動を積極化
- 協働学習の実践現場を広げること
- モンゴル国立教育大学：協働学習に関する学習者向けと教員向けの研修や研究を進めること！

参考文献

- 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- N. バヤルマ(2019)「協働学習に対する成人日本語学習者の意識調査—ピア・レスポンス活動を通して」モンゴル国立教育大学社会・人文学部研究紀要

ご清聴ありがとうございました。